

# Journal of Chubu University Education

No. 22  
2022

**【実践研究・実践報告】**

フランス交換留学生TAとの授業

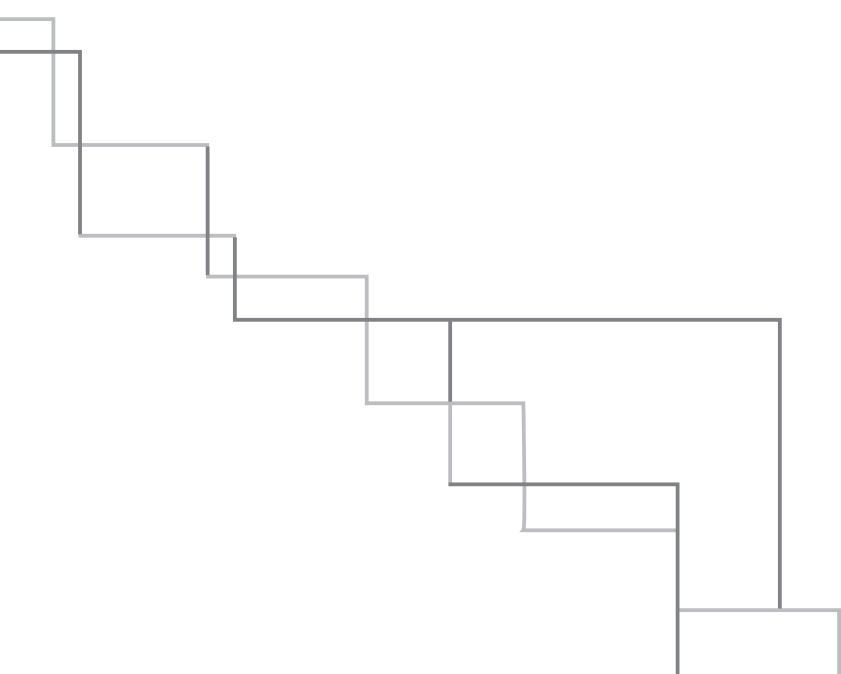
—「フランス語入門Ⅱ」「実践外国語A」の実践報告— ..... 鈴木順子

**【Practical Report】**

Teaching with a French Exchange Student as a Teaching Assistant

— Report on the Introduction to French II and the Practical Foreign Language A:

..... SUZUKI Junko



# フランス交換留学生TAとの授業

## ー「フランス語入門Ⅱ」「実践外国語A」の実践報告ー

鈴木 順子<sup>\*1</sup>

### 要 旨

フランス交換留学生をTAに迎えて行われた2022年春学期のフランス語授業は、ネイティブ発音が聞けることや質問への丁寧な対応などから、学生からの評価が大変高かった。主担当教員にも余裕が与えられ、ピアレビューやペアワーク、会話創作・実演などの新たな取り組みが可能となった。さらにTAがフランスや出身地域について複数回報告してくれたことで、異文化に対する理解を深める機会、他者への想像力を育む貴重な契機が与えられた。

### キーワード

第二外国語教育・人文知・交換留学生ティーチングアシスタント (TA)・ペアワーク・ピアレビュー

## 1 はじめに

筆者は2022年春学期にフランス・ベルピニャン大学からの交換留学生をTAに迎え、全学共通教育科目の二つのフランス語「フランス語入門Ⅱ」「実践外国語A」の授業を担当した。留学生TAと共に行ったこれらの授業を通じて、全学向けの第二外国語教育のあり方や異文化交流の意義について、非常に多くの学びが得られたため、本稿で報告する。

## 2 交換留学生TAを迎えて

2021年11月、国際センター、国際・地域連携部国際連携課より連絡を頂き、中部大学が交換留学協定を結んでいるフランス・ベルピニャン大学修士課程の学生、ルカ・リコルさんが来日するとのこと、人間力創成教育院語学教育プログラム（外国語）に所属する筆者に指導教官を引き受けてほしい旨の依頼を受けた。期間は2022年春学期の間である。ルカさんは新型コロナウイルス感染症流行によって何度も来日延期を余儀なくされたにもかかわらず、数年越しに日本での留学を強く希望してきた熱心な学生とのことであった。

2022年3月下旬、コロナ流行状況には関係者全員最後まで気を揉まされたが、ルカさんは無事来日を果たし、直後に国際センター担当者の方とZoom三者面談を行って、彼の研修時間割を決定した。ルカさんは、国際センターで日本語を週10コマ程度履修し、その他に日本文化研修、茶道華道実習、奈良研修旅行に参加

予定とのことであった。そして筆者が指導するのは、人間力創成教育院語学教育プログラム（外国語）が担う全学共通教育科目「フランス語入門Ⅱ」と「実践外国語A」でのティーチングアシスタント (TA) としての実習ということになった。(その後、国際センター・Conversation Roomでの会話TAも週1コマ行っていた模様であった)。

## 2.2 「フランス語入門Ⅱ」「実践外国語A」の授業

「フランス語入門Ⅱ」には、今学期27名の登録者がいた。全員に「入門Ⅰ」の受講経験がある。「フランス語入門Ⅰ」は、毎学期10クラスが開講され、計390名ほどが受講している。単純に計算すると、これら「入門Ⅰ」の受講生の中から1割弱がさらにフランス語学習を続けようと考え「入門Ⅱ」を履修しているということになる。クラスの中には、スペイン語話者2名と、ドイツ語の履修経験のある工学部3年生、マレーシアからの交換留学生（マレー語、中国語、英語、日本語が堪能）がおり、多言語的に開かれた雰囲気であった。「実践外国語A」は2年に一度開講される「入門Ⅱ」よりさらに一段階上のクラスになる。こちらは8名の受講者で、一層少人数であったが、中には中国語が母語の学生（日本語、英語も堪能）、フランス留学経験のある学生、すでにこの授業を受けたので単位は取れないが、また受講したいということで自主的に受

\*1 創造的リベラルアーツセンター、人間力創成教育院リベラルアーツ教育プログラム 語学教育プログラム（外国語）准教授

講している国際関係学部の3年生などがおり、こちらでも多言語に開かれた雰囲気があった。

使用テキストは、両方のクラスとも、会話練習を重視しながら、週一回の第二外国語授業でこなせる範囲の文法事項の習得を目指したものが選ばれている。下の図1は、その一つで、生活に密着した単語の確認、例えば色の名前を言わせたり、フランス語で自己紹介をさせたりするところから始まる。

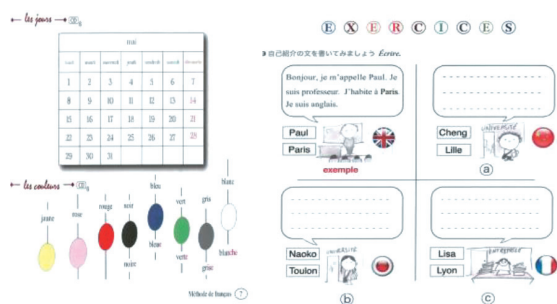


図1 「実践外国語A」テキスト

筆者が今学期両授業を担当するにあたっては、中部大の学生が第二外国語を選択する動機、学習に際してのニーズや興味を考えて、1) できるだけフランス語を学んだ経験が楽しい記憶になるような授業にすること、そのために、例えば学部が異なる者同士でペアを組んで会話練習を行うなどの工夫をすること、2) 多言語に触れることの重要性や、英語圏ではない文化に触れることの面白さができるだけ伝わる授業にすること、この二点を目指した。そのため、あいさつや自己紹介の仕方を学ぶことを中心に取り上げ、他方文法事項の解説や単語の暗記は必要最低限にするよう心がけた。

### 3 フランス人TAによって可能になったこと

初回授業(4月半ば)においてルカさんに自己紹介をしてもらったところ、母語のフランス語以外に、地域言語のカタルーニャ語、英語、スペイン語が話せるとのことであった。彼にとってはこの時が学生との初めての顔合わせで、多少緊張しているように見えた。初回は、黒板の字も小さかったが、注意しなくても数回後の授業では大きく読みやすい字で板書してくれるようになった。右上の図2は、フランス映画では何を観たら良いかという質問を学生がした際に、すぐにいくつかの映画タイトルを板書してくれている様子である。

ルカさんは常にさまざまな授業アイデアを提案してくれた。特に臨機応変にスマートフォンやインターネット資料を授業中に活用することが上手であり、早くも初回からスマートフォン画面に色を表示するといった

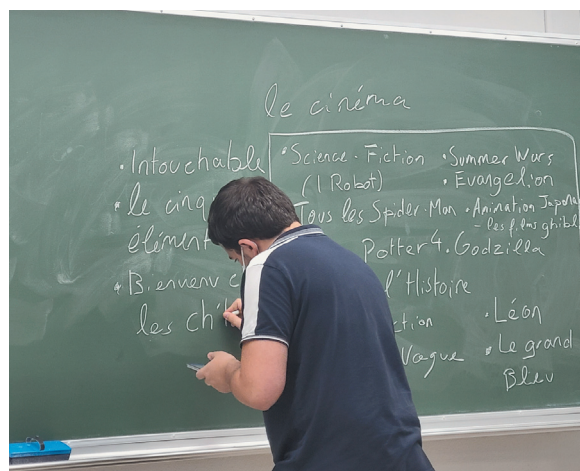


図2 お薦めフランス映画を板書

方法を用いていた。それにより図1に示すテキストの色の名前の学習が容易となった。そのため、ルカさんとの授業では、終始それらのツールを積極的に用いることにした。(彼によれば、フランスでは、公立高校入学時に全員がノートパソコンを所持し授業に臨むとのことである。購入には補助金が出る。)

また、授業中積極的に質問などをしていた学生には、授業後自分から英語で話しかけ雑談していた。個々の学生をよく見て丁寧に対応しており、また大変フレンドリーで親しみやすい人柄であったため、学生にはとても身近に感じられ信頼できるTAだったと思われる。

### 3.2 フランスに関するプレゼンテーション

学期中パワーポイントを用いながらフランス文化についてのプレゼンテーションをするよう依頼したところ、5、6月末に行ってくれた。発表に際してはルカさんがフランス語で話し、筆者が逐語訳をした。

まず5月末に、フランスの学生生活について発表があった。特に学生が聞き入っていたのは日本との違いであった。例えば、フランスには大学入試がないが(バカロレアという全国統一の高校卒業資格試験を通過できれば基本的に全国どこの大学にも入学できる)、入学後の進級の厳しさは有名で、ルカさん自身も失敗体験があるということを話してくれた。最初に入学したのはモンペリエ大学という南仏でも有数の有名大学の理系学部だったが、残念なことに2年次に進級できなかった。進路変更を余儀なくされ、改めてよく自分の適性を考え直し、語学が好きで能力も高いことに気づいて、ペルピニャン大学という実家に近い大学の英文学部に入り直したところ、その後は大変うまくいっているとのことだった。「自分はモンペリエ大学で失敗した後、実はパリのソルボンヌ大の文学部に行こうとしたのですが、こちらはコロナの影響でパリに足を運ぶことが許されず、エントリーできませんでした。

でも今では、地元のペルピニャン大学に行ったことをよかったと思っています。なぜなら、そのおかげでペルピニャン大にある日本との交換留学制度を使ってここに来られ、皆さんに会えたわけですから」と言っていた。ルカさんは20代前半で学生たちとの年齢も近い。日仏の学校制度の違いはあるものの、進路選択において挫折があった場合、そこでどのように頑張るか、自分の失敗談を正直に語ることで多くを教えてくれた。ルカさんがコロナに負けず日本に来たいと希望し続けていた理由、動機も、理解できるように思った。



図3 フランスでの学生生活について紹介

発表後には、学生から多くの質問が出た。エクセルにまとめて彼に送ったところ、すべてに対して次週丁寧に答えてくれた。その中からいくつか選んで紹介する。

1)「日本とフランスの大学を比べて双方の良い所と悪い所を教えてください」

ルカさんによれば、フランスには大学入試というものが存在せず、バカロレアを取得できればどの大学でも入れ（しかし前述の通り進級が厳しいが）、また学費がかからないのが良いとのことだった。日本の良いところは、大学内にコンビニや銀行など便利な施設があり、部活やサークル活動が盛んであることが良いと思う、ということだった。

2)「フランスは学費が実質無償ということですが、学費が無償ということはその分授業の質が低くなるのですか？教授たちはタダ働きなのですか？」

ルカさんは、フランスの大学がほぼすべて国立であり、教授職は給与面でもかなり優遇された職業である、と言った。フランスでは教育は社会が行うものと考えられており、家庭が行うものとする日本とは、根本的に教育観が大きく異なることに学生たちは驚いていた。

3)「部活は何があるのか知りたいです」

フランスには大学に部活やサークルというものがなく、スポーツや文化活動は、地域が運営する団体に加

入して行うという説明があった。

4)「日本は高校生までは髪色やメイクに厳しいですが、フランスではどうですか？」

ルカさんにとっては、「髪を染める」というのはショッキングピンクなどの派手な色にすることを意味するらしく、黒髪から明るめの茶色にする程度のことを念頭に質問した学生とははじめ話が噛みあわなかった。教室に一人として同じ髪色の学生がいないフランスの教室風景と日本のそれとの違いが思い起こされ、このすれ違い自体が筆者自身には興味深かった。ルカさんの答えは「目立つ色に染めるときには親の許可があればOKだろう。学校ではまあ問題ない」とのことだった。

二つ目のルカさんによるプレゼンテーションは6月末に行われ、自分の故郷であるカタルーニャ地方について語ってくれた。カタルーニャ地方がフランスとスペインのはざままで困難な歴史を背負わされてきたこと、現在もそれが続いていることがわかる大変貴重なものだった。自らの、フランス人でありカタルーニャ人でもあるというアイデンティティの複雑さについても語ってくれた。例えば親友は同じカタルーニャ人だが、スペイン人だということである。しかし学生の側にヨーロッパの歴史や地域問題についての基本的な知識が欠けており、筆者も時間の制約から詳しい解説を補足できなかったため、当事者の生の証言、せっきくの貴重な話も学生側の理解は浅いものになってしまったかもしれない。しかし、カタルーニャ州旗の成り立ちや意味を聞く学生もいて、これに対してルカさんは丁寧に説明してくれた。学生の側からは例えば以下のような感想が出た。

1)「フランスが日本と違い多様性のある国だからなのかどうかは分かりませんが、スペイン語や英語を話せるというのは旅行や海外での仕事で役に立つ様なことを自然に話せるようになるということに羨ましいと思いました」

これに対しルカさんは、「フランス人すべてが必ずしも語学が得意なわけではありません。自分はたまたまカタルーニャ地方の出身であり、多言語の環境にあったからだと思います。一般的なフランス人の中には、世代によりますが、実は英語が話せるのに積極的に話さない人も多いです」とのことだった。

2)（ルカさんが、父親がカタツムリ料理をしてくれる話をしたことにに対して）「カタツムリを取って食べていることに驚きました。釣りをしてお魚を食べると同様に、カタツムリをとって食べることは普通にされているのですか？」

ルカさんの答えは「はい」だった。気をつけるべきは、小さいカタツムリは取らないこと、大きいカタツ

ムリを選ぶのが良い、なぜならよく熟れているからということだった。

3)「フランス人が外国に旅行する際にはどこが人気ですか？」

EU圏内であれば、自由に往来できるということで、フランス人にとってはEU圏内の旅行が手軽で人気だということであった。そしてペルピニャン在住のルカさんにとっては、フランス・パリよりもスペイン・バルセロナの方が距離的にも心理的にもずっと近く（バルセロナはカタルーニャ州の州都）、例え国内であってもパリにはこれまで2回しか行ったことがないが、国外でもバルセロナには数えきれないほど行っているということだった。ペルピニャンに住んでいて都会で遊ぼうと思うならまずバルセロナに行くとのことであった。これも学生たちにとって国境の意味を問い直すきっかけを与えてくれるエピソードだったのではないかな。

これらの他にも、「ルカさんの発表を聞いて、フランス人全体の性格は集団主義より個人主義的な考えなのではないかと思いました。日本では集団主義の性格の人が多いので真逆の考え方の国同士だなと思いました」のような感想もあった。

#### 4 TAがいることで可能となった取り組み

ルカさんには、学期中、宿題などの提出物や小テストの採点添削を依頼した。彼はフランス流に、テストは20点満点でつけ、また、正解に✓マークをつけていたので、学生たちは返却された答案の見方に慣れるまで少し時間がかかったようだったが、大きな問題はなかった。おかげで筆者の授業後の負担はかなり軽くなった。

そのため、生じた時間で様々な新しい試みができた。例えば、学生に2人1組で会話を作って演じてもらう、という取り組みを行った（2回目の小テストと期末テスト時）。会話の創作時のアドバイス、発音や演技の指導もルカさんと二人で行った。想像以上に、学生らも楽しみながら工夫を凝らしてやってくれたように思う。どのペアも完璧に会話を暗記してきていた。これ

もルカさんがいてくれたため、二人で手分けをして発音をチェックしたり、些細な質問にも答えたりするなどのきめ細やかな対応・指導ができたからである。

ピアレビュー（図4）の試みも初めて可能になった。学生同士が上記の会話演技を採点し合い、それを筆者やルカさんの採点に加えて実際の成績に加えるというものである。採点要素は、「暗記度」「表現力」「発音の正確さ」の三項目で、それぞれ5点満点でつけてもらった。教員だけが採点を行うよりも、相互採点の方が、採点者になっているときには熱心に聞くことになる。また採点される側になっているときにも、仲間に採点されるということで練習時のモチベーションが上がり、適度の緊張感が保たれる。相互採点は総合的に、大変良いように見受けられた。確かに、「自分でも正しく発音できているかどうか自信がないのに、人を採点できない」という意見もあった。そのため、「ネイティブのように発音できているとか、絶対的に正しい発音である、ということではなく、適度なスピードで聞き取りやすかったか否か、言っていることが伝わったか否かで考えてほしい」と説明した。

また、普段なかなか板書する余裕のない、最新のフランス語の言い回しや、流行りの単語などもルカさんは適度に板書してくれ、学生には好評だった。

映画鑑賞の時間も取ることができた。ルカさんが映画好きな様子だったので相談したところ、いくつか候補を挙げてくれ、最終的に、ディズニー系のアニメーション映画「レミーのおいしいレストラン」（2007年、原題は「ラタトゥイユRatatouille」。南フランスの家庭料理名）に決まった。これをフランス語版日本語字幕で鑑賞した。パリのレストランを舞台にしたコメディである。学生には大好評だった。

ルカさんが授業中の教材提示や検索にスマートフォンをツールとしてよく使っていることから、学生にも授業ツールとして大いに使ってもらうことにした。下記の図5は、ルカさんが提供したSNS画面である（ルカさんの飼い犬が迷子になったが、運よく見つかったことを報告する投稿）。ルカさんにならい、自分の飼っているペットの写真をスマートフォン画面に出し、2人1組の会話で用いることにした。それぞれが自分の飼っている動物（飼っていない人は架空、インターネット上の写真で可）をスマートフォンで提示しながら「かわいいね」といった感情表現を入れつつ会話を作るようにした。

例えばペットの名前を紹介させた時のことであるが、飼い猫の名前が「ムー」だと言う学生に、ルカさんがその意味を聞いたところ「ムーはムーミンからとった」という説明であった。それに対しルカさんは、ムーミン（Moomine, Moomintroll）について小説として

| le dernier controle du 3 août 8月3日期末テストピアレビュー（相互評価） |                         |                          |                                           |
|-----------------------------------------------------|-------------------------|--------------------------|-------------------------------------------|
|                                                     | 暗記度<br>par coeur ou pas | 表現力<br>jouer bien ou mal | 発音の正確さ<br>bonne ou mauvaise prononciation |
| 人文・〇〇さん                                             |                         |                          |                                           |
| 工・〇〇さん                                              |                         |                          |                                           |
| 応生・〇〇さん                                             |                         |                          |                                           |
| 工・〇〇さん                                              |                         |                          |                                           |
| 応生・〇〇さん                                             |                         |                          |                                           |
| 応生・〇〇さん                                             |                         |                          |                                           |
| 国際・〇〇さん                                             |                         |                          |                                           |

採点者氏名

採点者学生番号

図4 ピアレビューのための採点表



図5 身近なSNSを教材に

もキャラクターとしてもまったく知らなかったため、「それは何か」とたずねた。こうした場合、自分たちの間で広く共有されている知識や慣習であっても、場所が変われば常識ではないことに気づかされ、その際には、簡単な文法や言葉を駆使してできるだけ相手にニュアンスが伝わるように工夫をしなければならない。そのような難しいが貴重な機会が、ルカさんのおかげでこのケース以外にも多々得られた。学生たちにとってはルカさんと話すことで、自分たちの文化、常識を客観的に見る機会が大いに得られたことと思われる。ところでルカさんの飼い犬の名前は「リュセッ」とで、これはカタルーニャ語で「光」という意味だということだった。

## 4.2 TAからの提言

「日本の学生はなぜ授業中発言をしがないのですか？間違えて単位を落とすのが怖いからですか？」これはルカさんが筆者に「最後に一つお聞きしたいことがあります」と改まって前置きしてからした質問である。筆者とのフランス語の授業のみならず、他の授業を見学した際にも同じことを感じ、滞日中最も疑問

に思ったことの一つだという。残念ながら、日本の学生は、小中高時代に教室内で教師が正解としたこと以外のことを言ったり予期しない質問をしたりすると怒られるということを多くの人が長く体験してきたため、大学生になっても、恥をかきたくないと言う気持ちから発言を控える人が多い、おそらくそれは単位を落とすことが怖いからというよりは、学生同士の間でできるだけ目立ちたくないと感じてのことではないか、と説明した。

ルカさんは納得し、日本人が外国語に弱いのはそのせいではないかと思うと言った。彼によれば、フランス人も、外国語習得は他国に比べると得意ではないが、フランスの場合には、特に上の世代に自国中心主義が強く、それが語学学習欲を弱めているということだった。

ルカさんは、滞日中、授業と並行して修士論文を執筆しており、それは外国人向けのフランス語の教授方法論についてだった。彼は「メソッド・アクションネル (la méthode actionnelle)」がフランスで最近最も行われている方法であることを教えてくれた。これは、調べてみると、行動中心主義（アクションネル）なアプローチに基づいた授業のことで、「学習の中心はあくまで学習者であり、彼らのニーズや興味をできるだけ正確に把握した上で授業を組み立てること」を念頭に、「外国語教育を通して学習者が身につけるべき最も大切なことは、外国語の能力そのものというよりはむしろ、21世紀のヨーロッパ市民として不可欠な異文化間意識を備えたバランスのよい人格形成であり、母語や文化の異なる他者と理解し合い、共通の目的達成のために協力し合えるようになること」を目標に掲げる教授方法論だということである。（参考：小西英則「Robert, Jean-Pierre, Rosen, Evelyne, Reinfardt, Claus (2011). Faire classes en FLE-Une approche actionnelle et pragmatique. Paris : Hachette, 192p. の書評」《Revue japonaise de didactique du français》10巻1-2号、2015年、pp.177-179. [https://doi.org/10.24495/rjdf.10.1-2\\_177](https://doi.org/10.24495/rjdf.10.1-2_177) 最終アクセス2022年9月20日）

手法としては、グループワークの重視なども掲げられており、日本における第二外国語教育にも応用できそうなヒントが多々あり、さまざまな気づきが得られた。教育法の更新には常に努めていきたいと改めて感じた。

学期末に行われた「学生による授業評価」においては、驚くほど留学生TAについて評価が高かった。回答者のほぼ全員が自由記述欄に何らかのコメントを残してくれた。

自由記述回答者24名の中で、多かった評価意見をま

とめると以下ようになる。なお、否定的な意見はなかった。

- 1) ネイティブの発音に毎回触れられたことがよかった (同意見13名)
- 2) 発音、文法、単語知識などについて質問した際の対応が丁寧で優しく、質問がしやすかった (同意見12名)
- 3) フランス文化、フランス内地域文化を知ることができた (同意見 8名)



図6 ルカさんと学生たち

詳しくは、Tora-net Portal→リンク「授業評価・授業改善アンケート」→「魅力ある授業づくりのために」→ログイン (学内者限定) →「鈴木順子2022年春季」をご覧ください。

こうした留学生TAへの学生の満足度の高さが、授業運営全般に対する肯定的評価にもつながったことは明らかである。筆者に余裕が与えられ、新しい試みも行えたため、「実践外国語A」については、「この授業に取り組む教員の熱意ある態度を感じましたか」「授業を理解させるためのいろいろな手段・工夫は適切でしたか」「教員は学生の反応を確かめながら授業を運営していましたか」「この授業は総合的に魅力的な授業でしたか」に対して全員が最高点の5点をつけており、「フランス語入門Ⅱ」については、それぞれ平均獲得ポイントが4.78, 4.67, 4.73, 4.63点となった。(図6は最終授業で撮影したルカさんと学生たちの様子である。)

## 5 おわりに

ネイティブのTAとのペアで行う授業は筆者にとって初めてであったが、これほど学生から好意的な反応が得られるとは思っていなかったし、また筆者にとっても大いに助けられ、かつ学びが多い学期になり嬉しい驚きであった。ネイティブTAと複数で受け持つ授業は学生にも日本人教員にも大変実りの多いものであることがわかった。このように教員に余裕を与え、それによって学生一人一人を大事にできる授業は大変貴重であると思う。

最後に、第二外国語教育について、2022年7月2日に中部大学創造的リベラルアーツセンターが行ったシンポジウム『リベラルアーツと自然科学』のパネリス

トによる対談の中で、次のような発言があったので紹介したい。パネリストの一人である長谷川眞理子氏 (総合研究大学院大学学長) が次のように述べている。「語学というのは、言語の体系が違くと人間の自分自身や世界に対する見方や考え方がどれほど違うのかを学ぶものであり、単にフランス語がべらべらになるとかいうことではない。(略) 広く深い物の考え方ができる人間になると、一市民として、これからの社会において直面する諸問題に対し、何ものにも惑わされることなく自分自身の判断を下すことができるようになる。そういう人間になることが最終目的」であると。それを受けて司会者の石井洋二郎氏 (創造的リベラルアーツセンター長) が「他者への想像力が不可欠です。だからこそ『人間知=ヒューマニティーズ (Humanities)』を涵養するリベラルアーツ教育が重要」と述べていた。(詳細は『リベラルアーツと自然科学』水声社、2022年冬刊予定を参照のこと。)

たった半年の第二外国語学習で何が得られるのかと思われる向きもあるかもしれないが、短い期間ではあっても、世界にはこれほど自分とは違うものの見方をしている人がいるということを知る大事な経験を、第二外国語の授業では積むことができる。そしてそれは他者への想像力を持つ人間を育てる貴重な一步になると思う次第である。今回の留学生TAとの授業は、こうした異なる他者と出会う人間知 (ヒューマニティーズ) としての第二外国語授業に多少なりとも近づけたのではないかと感じている。

次はいつになるかはわからないが、こうした留学生TAを迎える機会が今後も続くことを心より願いつつ、本学における全学共通教育科目のフランス語授業については、上のような理念のもとで今後も引き続き取り組んでいきたい。

最後になったが、中部大学における交換留学生制度を支え、コロナ禍でも力を尽くされている国際関係学部国際学科の先生方、国際センター・国際・地域推進部国際連携課の胡桃澤様、岡島様他の皆様に心から敬意を表したい。

ルカさんは中部大学では熱心に日本語の勉強も並行して行っていて、教員免許を取得したら再度日本に来てフランス語を教えることを願うと言っていた。これは彼と日本で出会った人皆の願いでもあるかと思う。

# Teaching with a French Exchange Student as a Teaching Assistant — Report on the Introduction to French II and the Practical Foreign Language A:

SUZUKI Junko<sup>\*1</sup>

\*1 Associate Professor, Creative Liberal Arts Center, Liberal Arts Education Program,  
Language Education Program (Foreign Languages), School of General Education,  
Chubu University

## Abstract

The French classes in the spring semester of 2022 were joined by a French exchange student as a teaching assistant (TA) and were well received by students because they had an opportunity to hear native pronunciation and their questions answered directly by the TA. The main teacher was able to introduce extra activities such as peer review, pair work, and conversation creation and demonstration. The students also learned from multiple reports provided by the TA about France and his hometown, deepening their understanding of a different culture and increasing their imagination toward others.

## Key words

Second Language Education, Humanities, Exchange Student Teaching Assistant (TA),  
Pair Work, Peer Review